

「UDトーク」を使おう！（2-活用と課題編）



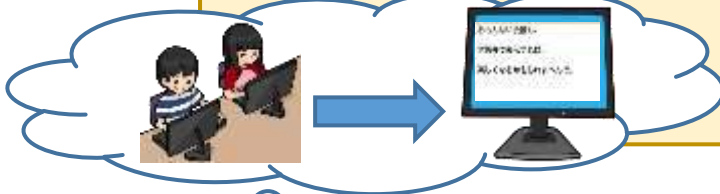
「UDトーク」以外の
情報保障の手段は？

本校には、聴覚障がいのある教職員が6名いますので、会議や研修のときには、必ず手話や文字による情報保障を行っています。その際、文字保障はパワーポイントや「IPトーク」というアプリを使っています。



「IPトーク」って何ですか？

「IPトーク」は、しゃべった言葉をコンピューターではなく、人間が聞き取ってパソコンに入力していきます。一人でパソコンに入力する場合は、しゃべった言葉の1/4ぐらいしか文字にすることができませんが、「IPトーク」は、複数（2～4人）で一斉に入力でき、より多くの情報を文字にします。



IPトーク（手動）	UDトーク（音声認識）
表示が遅れ気味になる	リアルタイムで変換できる
入力できる情報に限りがある	話した内容のほとんどが表示される
入力ミスが生じる	誤変換が生じる
インターネットは不要である	インターネットに接続する必要がある
複数のパソコンと入力者が必要	スマートフォンが1台あればOK

・・・文字保障の2つのシステムを比較するとこんな感じになります。



「UDトーク」は便利でいいですね！

研修のとき、これまでなら入力を担当する教員は、話した言葉を文字にすることに一生懸命になり、内容を聞いて研修を深めることが難しかったのですが、「UDトーク」を用いればそういう心配なく、情報保障をしつつ全ての教員が研修に専念できます。



しかし、「UDトーク」を本格的に使うには、いくつかの問題があるんです。



どんな問題ですか？

一つは、費用の問題です。



えっ、「UDトーク」って無料だと聞いてますが

学校のような機関は、「UDトーク」の無料版を業務で使用することは禁止されていて、使うには有料の「法人契約」が必要です。教育機関向けプランは、初期費用5万円と月々1万6千円のコストがかかるそうです。使用する端末（スマホやタブレットなど）も必要になりますし、通信費用も考えなければなりません。

個人的な会話などは、無料版を使っても差し支えないのですが、今後、教員の会議や研修だけでなく、授業で使うことも考えると、法人契約は必須だといえます。



「法人契約」をしている学校ってあるんですか？



大学なら、愛媛大学をはじめ多くの大学があります。ろう学校は山形聾学校と葛飾ろう学校、また難聴特別支援学級がある京都市立二条中学校も。支援学校や支援学級ではない中学校の導入例 (https://book.mynavi.jp/macfan/detail_summary/id=56272 「すべての人を幸せにする理想的な『ノーマライゼーション』」) も。



当然、授業でも使っているわけですね。



学校の授業で児童生徒に使う場合、教員が会議や研修で使う場合とは違う難しさがあることを考えておかなければならないと思います。

文字を読む速さが遅い子供は、先生の言った言葉が全て文字になると読むことだけで時間がかかり、文字の情報をうまく使いながら授業に参加することが難しい場合が考えられます。その場合、小・中学校等なら学校生活支援員によるサポートの方が適している場合もあるでしょう。

授業の流れに沿った形で、板書や先生の声、口の形、動きを見ながら情報収集し、手元の画面で文字を確認するという使い方ができればベストです。また、誤変換でも正しい内容を類推できる力も必要でしょう。

本校でも、「UDトーク」が業務で使えるように検討していますが、現時点では導入には至っていません。もし導入することになれば、音声認識の精度も良く、研修や会議で情報保障を担当する教職員の負担を軽減できることから、これまでの方法より、被支援者、支援者ともにメリットは大きいでしょう。

第15回さがの映像祭実行委員会事務局より

手話は言語～デフムービーって何だろう～

第15回 さがの映像祭

2019.2/16 土 京都・同志社大学 寒梅館

第15回映像作品コンクール 応募作品上映

特別企画

ふたりの今…両監督が制作への思いを語る!

※今村監督はビデオ出演

●参加協力券つきプログラム販売中!

A5 サイズ・フルカラー16ページ

一般 1,000円 学生 700円



【お問い合わせ】

第15回さがの映像祭実行委員会事務局
 (社福) 全国手話研修センター企画課
 FAX 075-873-2647 TEL 075-873-2646
 →公式サイト <http://www.com-sagano.com/>

10:00 上映 今井ミカ監督



16:00 上映 今村彩子監督



ShuR (<https://shur.jp/>) を知っていますか?

「ShuR」とは何か、という一言では説明しづらいのですが、「テクノロジーで手話をレギュラーに」というホームページのキャッチコピーが示すように、IT技術を生かした手話通訳事業を行っている会社です。

このモバイルサインと呼ばれるタブレット端末やパソコン、スマートフォンを利用し、遠隔地からテレビ電話を使って行う手話通訳サービスは、JR東日本や花王、鐘紡といった有名な企業や、いくつかの自治体が利用しているようです。そして、「SLinto」という特殊な手話キーボードを使った手話辞典もホームページで公開しています。



また、この会社とともにシュアールグループを形成しているNPO法人シュアールは、「ろう者のエンターテイメントや教育分野に焦点をあて、手話で暮らす人々の暮らしが、より豊かになることを目指して活動」しており、観光地や公共施設向けの手話翻訳や映像制作、講演講師の派遣の他に、インターネットで「手話TV」を公開しています。

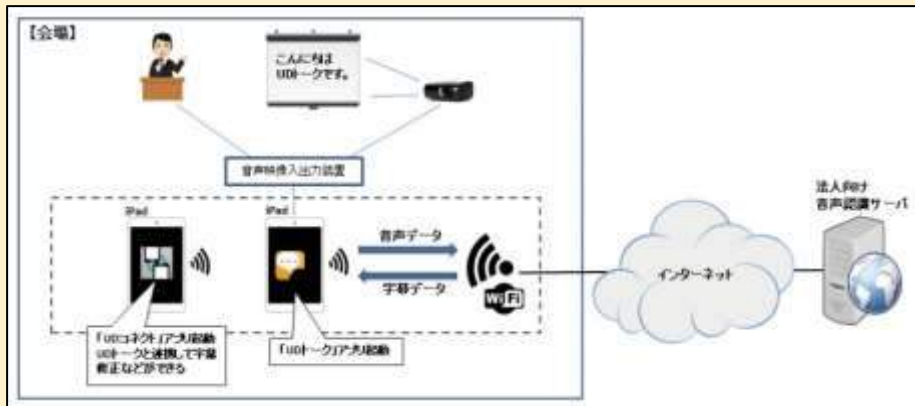
みみちゃん担当者は「SLinto」を実際に使ってみました。キーボードが独特で、まだ思ったようには使えないものの、考え方がユニークだと思いました。オンライン辞典であるWikipediaのように、ユーザーが手話を登録することもできるそうです。

「UDトーク」を使おう！（3-おまけ）



「UDトーク」は他にどんなことができますか？

「UDコネクト」というアプリを使えば、内容の修正や保存もできます。「IPトーク」と合わせたような使い方、とでもいえばいいでしょうか。



（図は、全国ろう学校PTA連合会のホームページのものです）



面白い使い方はありますか？



日本語でしゃべって、英語にする翻訳機能とか。



「もんじゃない会議も、大阪弁で表示すれば、楽しくなるかもしれまへんで。」

大阪弁で、音声認識の結果を示す機能とか（結構、愉快です）。

「UDトーク」は、音声認識だけでなく、キーボードや手書きでの入力もできますので、日常のコミュニケーションツールとして、聞こえない人が、聞こえる家族やろう学校以外の友人と会話をするときなどに、筆談メモ代わりに使えば大変便利だと思います。誤変換もありますが、逆に会話が弾むかもしれませんよ。

編集後記 UDトークについては、担当者自身があまりよく分かっていなかったもので、一から勉強し、整理してみました。前号の「基本操作編」の内容が理解でき、ようやく、いろいろな使い方があることが分かりました。2ページ目の最後にも記しましたように、このアプリは、現在の本校では法人契約ができておらず、情報保障の一部を担うといったきちんとした形で使用することができません。導入するとかかなり有効だと思われるのですが、法人契約のための予算を要望するには、どれぐらい効果があるのかを具体的に示す必要があります。しかし、それを確かめるために試しに使うだけでもお金がかかるわけです。予測か実績か「どちらが先か」のような話になってしまい、せつかくのテクノロジーの進歩が教育の現場で活用されるには障壁が多いということも最近痛感しています。